

## Saptôtsada の語義について

宮 坂 宥 勝

アヴァダーナ文学の雄篇である *Divyāvādāna* は、つとに E. B. Cowell と R. A. Neil が諸種の写本を用いて校訂本を出版した。<sup>(1)</sup>その後、今日に至るまで部分訳や研究がすすめられてきた。<sup>(2)</sup>校訂本のなかの第33章 *Śārdūlakarṇāvādāna* (虎耳アヴァダーナ (以下、略称 *Śār°*)) は写本が損壊していたので、未定稿のままに Appendix A (XXXIII) に収めてある。*Śār°* は、その後、S. Mukhopadhyaya がチベット訳、漢訳を参照して校訂本を出版した。<sup>(3)</sup>また、P. L. Vaidya は 1959年に *Buddhist Sanskrit Texts-No. 20* に *Divyāvādāna* を収めている。これは前記の二つの校訂本にもとづいたものであるが、校訂のための注記はない。*Śār°* を Cowell 本にもとづいて研究したものに、W. Zinkgräf の論文がある。<sup>(4)</sup>

*Śār°* がジャイナ教のマータンガ伝説と共通することが指摘されているが、これはむしろ *Mā-taṅga-jātaka* との類同が注目されるものであって、直接に *Śār°* のモチーフとは関連はない。

漢訳の摩登伽経類には次の4種がある。

- (1) 後漢・安世高訳、摩登女経<sup>(6)</sup>
- (2) 東晋・失訳、摩登女解形中六事経<sup>(7)</sup>
- (3) 呉・竺律炎共支謙訳、摩登伽経<sup>(8)</sup>
- (4) 西晋・竺法護訳、舍頭諫太子二十八宿経<sup>(9)</sup>

このうち(3)(4)は大正蔵密教部に収めてあり、サンスクリットの *Śār°* と対応する。しかし、漢訳2訳ともにサンスクリット原典より古形を保ち、全般的にみて簡潔である。

チベット訳は北京版 No. 1027 *Stag-rnaḥi rtogs-ḥa rjod-ḥa* [*Divyāvādāna* XXXIII] Tr by Ajitaśrībhadrā, Śākya-ḥod である。<sup>(10)</sup>

*Śār°* の一節に次の文言がある。<sup>(11)</sup>

Tasmin khalu samaye puṣkarasāri nāma brāhmaṇa utkūṭaṃ nāma droṇamukhaṃ paribhuṅkte sma / *Sasaptôtsadam* satṛṇakāṣṭhōdakam dhānyasahagataṃ rājñāgnidat-<sup>(12)</sup> ttena brahmadeyaṃ dattam / Puṣkarasāri punar brāhmaṇa upeto mātṛtaḥ pitṛtaḥ<sup>(13)</sup> saṃsuddho gṛhiṇyām anākṣipto jātivādēna gotravādēna yāvad ā saptama-mātāma-<sup>(14)</sup> hapitāmahaṃ yugapad upādhyāyo<sup>(15)</sup> 'dhyāpako mantradharaḥ trayāṇaṃ vedānaṃ pāra-<sup>(16)</sup> gaḥ sāṅgōpāṅgānāṃ sarahasyānāṃ sanighaṇṭakaitābhānāṃ sākṣaraprabhedānāṃ<sup>(17)</sup>  
<sup>(18)</sup>

itihāsapañcamānām padako vaiyākaraṇaḥ / lokāyata-yajña-mantra-mahāpuruṣalakṣa-  
neṣu pāragah / sphitam utkūṭam nāma droṇamukhaṃ paribhunkte /

Vaidya 本, Cowell 本とも校訂が不十分であって, 読みが困難であるので, 一応, 上記のよ  
うに訂正して読むことにした。その校訂箇所については一々注記を付してあるので参照して  
いただきたい。

〔和訳〕 そのとき, 実に, プシュカラサーリンというバラモンはウトクータという聚落を領  
有していた。〔ウトクータは〕 *sasaptōtsada*, 草, 樹木, 水があり, 穀物が豊かで, アグニダ  
ッタ (Agnidatta) 王によってバラモンへの贈物として与えられたものであった。

また, プシュカラサーリン・バラモンは母と父に関して清らかさが得られ, 妻について侮蔑  
されず, 血統論により種族論によって第七世代の母方の祖父, 父方の祖父に至るまで, 同時に教  
師であり, ヴェーダ聖典を読誦する学匠であり, 呪文の念誦者であり, 三つのヴェーダ聖典, ヴェ  
ーダの支分と副支分, 秘教, 語彙と儀軌, 文字の分類, 古伝なる第五〔のヴェーダ聖典〕に通曉  
し, ヴェーダのパダパータの韻文の精通者であり, 文法学者である。唯物論と供儀の呪文と大人  
相とに通じたものである。かれは繁栄したウトクータという聚落を領有した。

上記の文中で, *sasaptōtsada* とあるのは, Cowell 本では *saptōtsada* とあるが, いずれに  
しても, この語の意味は明らかでない。この部分の漢訳『摩登伽経』は, 次のとおりである。

當是時也。有婆羅門。名蓮花實。宗族高美。父母眞正。七世以來。淨而無雜。通四圍陀。  
才藝寡匹。時有國王。名曰大與。總領天下。威力自在。以一聚落。封蓮花實。令其統領。  
其土豐盛。人民殷富。(大正, 21, p. 401 下)

サンスクリット原本の *sasaptōtsadam satṛṇakāṣṭhōdakam dhānyasahagatam* の箇所  
に対応するのが, 「其土豊盛, 人民殷富」であると思われる。これによると, *sasaptōtsadam* は  
プラークリット語で *sasattōtsadam* または *sattōtsadam* (人民殷富) とあったのではないかと  
いう推定が可能である。

『舎頭諫太子二十八宿経』は, 極めて簡潔な文言である。すなわち,

時有梵志。名弗袈娑。服食藥草。身有七合。合集草木。供事水火及梵天王。

(大正, 21, p. 411 下)

ここで, 弗袈娑つまりプシュカラサーリンについて「身有七合」とあるのは, *sasaptōtsada* の  
訳語であることは, 三十二相の一つの「七処皆満」が *saptōtsada* であることから明らかである。  
サンスクリット原本にはプシュカラサーリンが大人相(三十二相)に通曉した者とあるが, 『舎頭  
諫太子二十八宿経』では, 大人相はプシュカラサーリン自身の身体的特徴として説かれている。  
この点については後に検討することにする。

チベット訳は, 次のとおりである。

/ yan dus gzan zig gi tshe / bram ze pad ma'i snin po zes bya ba gyen du 'byun pa'i

luñ pa'i sgo 'zes bya ba na / khyab par sa dan / chu dan / 'sin dan ldan pa rtag tu 'bru  
sna rnams smin pa / rgyal po me sbyin 'zes bya bas / bram ze de la byin nas de na  
gnas so / yan bram ze pad ma'i sniñ po'i pha ma bram ze'i rigs yoñs su dag pa dan  
ldan pa / rigs 'khrugs pa med pa / rigs dan rus ma smad pa / pha mes dan ma mes  
bdun rgyud kyi mkhan por gyur pa dan / klog dan / gsañ snags 'dsin pa / rigs byed  
gsum gyi pha rol tu phyin pa yan lag dan bcas pa dan / ñe ba'i yan lag dan bcas pa  
dan / brda ñes par sbyar ba dan bcas pa dan / g'zad gañ ces byas ba dan / lña pa  
dan rkañ pa dan / bya kar na dan / 'jig rten gyañ phan pa'i gtsug lag dan / mchod sbyi  
gyi rabs dan / skyis bu chen po'i mtshan rnams rjes su sbyar ba rgyas 'sin grol bar  
ston pa 'zig go /<sup>(21)</sup>

sasaptôtsadam satṛṇakāṣṭhōdakam dhānyasahagatam に対応する箇所は, *khyab par sa dan / chu dan / 'sin dan ldan pa rtag tu 'bru sna rnams smin pa* / (あまねく地と水と樹木とを有し, 常に穀物がみのり) とあって, *sasaptôtsada* に相当する語は存しない。

Śārdūlakarṇāvadāna には前掲文と同類のものが, 他にも二箇所に見出される。

(1) atha Triśaṅkor mātaṅgarājasyāitad abhavat

— asty uttarapūrveṅōtkūṭo nāma droṇamukhaḥ / tatra puṣkarasāri nāma brāhma-  
naḥ prativasati / upeto māṛṭtaḥ piṭṛto yāvat traivedike pravacane vistareṇa / sa  
cōtkūṭam droṇamukham paribhunkte sasaptôtsadam satṛṇakāṣṭhōdakam dhānya-  
bhogaiḥ sahatam rājñāgnidattena brahmadeyam dattam /<sup>(22)</sup>

(2) vidyayā ye tu sampannāḥ saṃsuddhās caraṇena ca /

jātyā cāivānabhikṣiptā mantraiḥ paramatāṃgatāḥ // 7 //

adhyāpakā mantradhārās triṣu vedeṣu pāragāḥ / nighaṅṭakaiṭabhān vedān brāh-  
maṇā ye hy adhiyate / tais tādrśair hi sambandham kurvantiḥa dvijātayaḥ // 8 //<sup>(23)</sup>

(1)は『摩訶伽經』とチベット訳とでは対応部分を欠き、『舍頭諫太子二十八宿經』では, 前述と同じくプシュカラサーリンについて語った「菓草為食。常事水火諸神梵天」が, *sasaptôtsadam satṛṇakāṣṭhōdakam dhānyabhogaiḥ sahatam* に相当すると思われるが, 全く相違する。おそらく, 本經は經典成立史上の過渡的な位置を占めているということ, 換言すれば, サンスクリット原典が成立した時点より遥かに古い時代の本經が漢訳の形態で凍結されているとみるべきではなからうか。

プシュカラサーリンにまつわる物語は, 他の多くの文献に認められる。が, そのうちでも Śārdūlakarṇāvadāna との関連において見のがすことができないのは, *Dīghanikāya* (長部經典), III *Ambatṭhasutta* (以下, 略称 *Am°*)<sup>(24)</sup> である。その冒頭の書き出しは, さきに掲げたサンスクリット原文の箇所とほとんど類同である。

## Ambaṭṭhasuttaṃ

1. evaṃ me suttaṃ / ekaṃ samayaṃ bhagavā kosalesu cārikaṃ caramāno mahatā bhikkhusaṅghena saddhiṃ pañcamattehi bhikkhusatehi yena icchānaṅgalaṃ nāma kosalānaṃ brāhmaṇagāmo tad avasari / tatra sudamṃ bhagavā icchānaṅgale viharati icchānaṅgalavanasaṅde / <sup>(25)</sup>

## I Pokkharasātivatthu

2. tena kho pana samayena brāhmaṇo pokkharasāti ukkaṭṭhaṃ ajjhāvasati *sa-ttussadaṃ* satīṇakaṭṭhodakaṃ sadhaññaṃ rājabhoggaṃ, raññā pasenadinā kosalena dinnam, rājadāyaṃ brahmadeyyam / ... <sup>(26)</sup>

3. tena kho pana samayena brāhmaṇassa pokkharasātissa ambaṭṭho nāma māṇavo antevāsī hoti ajjhāyako mantadharo, tiṇṇam vedānam pāragū sanighaṇṭukeṭubhānam sakkharappabhedānam itihāsapañcamānam padako, veyyākaraṇo, lokāyatamahāpurīsalakkhaṇeṣu anavayo, anuññātaṭṭhānāto sake ācariyake tevijjake pāvacane — “yam aham jānāmi taṃ tvam jānāsi, yaṃ tvam jānāsi taṃ aham jānāmi” ti / <sup>(27)</sup>

〔和訳〕 1. このように、わたしによって聞かれた。ある時、世尊は五百人の大きな比丘衆といっしょにコーサラ国に遊行して、イッチャーナンガラというコーサラ国のバラモンの村へ行きたもうた。そこで、ちょうど世尊はイッチャーナンガラ〔村〕のイッチャーナンガラ密林に住されたのであった。

## ポッカラサーティの物語

2. そのとき、またバラモン・ポッカラサーティは、ウッカッタに留まっていた。〔このウッカッタ村には〕人びとが多勢住み、草や木や水があり、穀物がみのる王領地であって、コーサラ〔国〕のパーセナディ王によって与えられ、王の贈物としてバラモンに施与されたものである。

3. そのとき、また、バラモン・ポッカラサーティにアンバッタという若いバラモンの子弟がいた。〔かれは〕ヴェーダ聖典を読誦し、呪文を受持し、三つのヴェーダ聖典に通曉し、〔ヴェーダの〕語彙と儀軌・文字の分類に、古伝なる第五〔のヴェーダ聖典〕に〔通曉するものであり〕、ヴェーダのパダパータ (padapāṭha) において韻文で綴られた語に精通するものであり、文法学者であり、唯物論と大人相とに関して欠けることなく、わが師伝の三つの明知〔＝三つのヴェーダ〕の教義について許可され承認されたものである。すなわち、「わが知れるものを汝は知る、汝が知れるものはわれ知る」と。

この *Am*<sup>o</sup> に対応するのは漢訳『阿摩昼経』で、前掲パーリ文に相当する箇所を示すと、次のとおりである。

如レ 是我聞。一時佛遊ニ 俱薩羅國ニ。與ニ 大比丘衆千二百五十人ニ 俱。至ニ 伊車能伽羅俱薩羅婆羅門村ニ。即於ニ 彼伊車林中ニ 止宿。時有ニ 沸伽羅婆羅婆羅門ニ。止ニ 郁伽羅村ニ。其

村豊樂人民熾盛。波斯匿王即封<sub>二</sub>此村<sub>一</sub>。與<sub>二</sub>佛伽羅娑羅婆羅門<sub>一</sub>。以爲<sub>二</sub>梵分<sub>一</sub>。此婆羅門  
 七世已來父母真正。不<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>他人之所<sub>一</sub>輕毀<sub>一</sub>。三部舊典諷誦通利。種種經書皆能分別。  
 又能善<sub>二</sub>解大人相法祭祀儀禮<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>五百弟子<sub>一</sub>。教授不<sub>レ</sub>廢。其第一摩訶弟子名<sub>二</sub>阿摩晝<sub>一</sub>。  
 七世已來父母真正。不<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>他人之所<sub>一</sub>輕毀<sub>一</sub>。三部舊典諷誦通利。種種經書皆能分別。  
 亦能善<sub>二</sub>解大人相法祭祀儀禮<sub>一</sub>。亦有<sub>二</sub>五百摩訶弟子<sub>一</sub>。教授不<sub>レ</sub>廢與<sub>レ</sub>師無<sub>レ</sub>異。<sup>(28)</sup>

これらによって、*Śārdūlakarṇāvadāna* の主要なソースが *Ambatṭha-sutta* = 阿摩昼經にあることは確かであることが知られる。もちろん、*Śārdūlakarṇāvadāna* において四姓が生れ(jāti) や氏姓 (gotra) によって区別されること、すなわちそれが先天的な差別ではないことを主張する文言は *Sutta-nipāta* のなかの *Vasala-sutta*<sup>(29)</sup> にもとづくことは明らかである。だが、物語じたいは多分に *Am°* のストーリーをアレンジして *Śār°* が成立したことは確かである。

*Śār°* の物語の大筋は、このようである。釈尊の弟子アーナンダ(Ānanda)に水汲みをしていたチャンダーラ族の娘チャンダリー(Caṇḍālī)は恋情を寄せる。チャンダリーはアーナンダとの結婚を望むが、身分の違いはもとより、アーナンダは出家の身である。釈尊はチャンダリーを諄々と諭して、ついにチャンダリーは出家し釈尊の弟子となる。このとき、仏が階級の差別・身分の相違は人間にとって本質的な問題ではないとして、ある伝承を語って聞かせる。そこに登場する人物がトリジャンク (Triśankhu) とよばれる国王である。かれはガンガー河畔を領有していたが、卑賤な種族だとされるマータンガ族の出身であった。<sup>(30)</sup> 王にはシャルドゥーラカルナ (Śārdūlakarṇa 虎のような耳をもった者。虎がさまざまな物音を聞き分けることができるのに喩えたもので、賢者の意。) という王子がいた。漢訳ではマータンギーが主人公と目されるところから摩登伽経と名づけたと思われるが、アヴァダーナのほうは、実はシャルドゥーラカルナにまつわる古譚が首題となっているので、*Śārdūlakarṇāvadāna* と題してあるのであろう。王子はバラモン・プシュカラサーリンの娘のプラクリティ (Prakṛti) を妃として迎えようとした。だが、王子はもともとマータンガ族であるから、プシュカラサーリンはバラモン族の自負心から、この結婚の申し入れを断わってしまう。釈尊は貴賤は生れに何ら関わりがないことを教えて、プシュカラサーリンの迷妄を開いたというのである。シャルドゥーラカルナとプラクリティとはめでたく結ばれ、プシュカラサーリンは在俗の弟子として仏教徒に帰依した。

*Am°* ではバラモン・ポッカラサーティ (Pokkharasāti) はコーサラ国パセーナディ (Pasenadi) からコーサラ国のウッカッタ (Ukkaṭṭha) 村を施与された。ポッカラサーティには青年バラモンのアンバッタという弟子がいた。ストーリーの運びはバラモン族とクシャトリア族との優劣を論じたものである。釈尊はアンバッタに対してバラモンの優位性を批判し、これを否定する。結果、アンバッタは釈尊に帰依し、ポッカラサーティもまた在家信者となった。

*Śār°* と *Am°* を対比すると、Puṣkarasārin = Pokkharasāti, Utkūṭa = Ukkaṭṭha と対応し、舞台もまたコーサラ国である。ただし Pasenadi が Agnidatta となり、また、*Am°* では

アンバッタがヴェーダの諸学に精通した人物であるのに対して、Śār° ではそれがすべてプシユカラサーリンという一人物に帰せられている相違をみる。そして両者に共通して認められる点は、いうまでもなく階級否定を主張していることである。

ところで、Śār° の *sasaptôtsada* (もしくは *saptôtsada*) は Am° では *sattussada* とある。注釈 (*Ambatṭha-sutta-vannaṇā*)<sup>(31)</sup> によると、*ussadatā* (異本, *ussadakā*) nām 'ettha bahulatā ti, taṃ bāhullaṃ dassetuṃ bahujaṇan ti ādi vuttaṃ とある。*ussadatā*(多いこと, 多い状態) というのは、ここでは多様性ということである。その多様性を示すために、多くの人びと(*bahujaṇa*) 云々と説かれる、とある。『阿摩屋経』(本論文5頁)で「人民熾盛」とあるのが、まさしく、この語に当る。いずれにせよ、これらによると、*sattussada*=*satta*+*ussada* と語分解され、サンスクリットの語形では *sattva*+*utsada* または 仏教混淆梵語では *satva*+*utsada* となる。ところが、パーリ語の *satta* にはサンスクリット語の *sattva* と *sapta* との両義があることから、サンスクリット語形で表現する場合に仏教混淆サンスクリットの *satvôtsada* もしくは正純サンスクリットの *sattvôtsada* とせず *saptôtsada* としてしまったのではないかということが、一応考えられる。果して、そうであろうか。

*saptôtsada* は前述のように、三十二大人相のうち数えられるものであるが、ここではウトクータの村のありさまをのべた文言でなければならぬはずである。二つのケースが考えられる。一つは *sattôtsada* (*sattva* または *satva* を *satta* という俗語形で示すことはアヴァダーナ文学として十分考えられることである。) とあるべきを *saptôtsada* と誤写したとするもの。他はアヴァダーナ作者がある種の意図をもって *saptôtsada* としたとみるもの。ところで、*saptôtsada* が誤写か、または作者の誤解による結果であると、単純に考えられないむきがある。

『ピサ本生物語』(Bhisa-jātaka) に、次の一節がある。

catussadaṃ gāmvaram samiddham / dinnam hi so bhuñjatu Vāsavena / avitarāgo maraṇam upetu / bhisāni brāhmaṇa yo ahāsi.<sup>(32)</sup>

〔和訳〕 インドラ神によって与えられたかのような四つの特色をもち、繁栄したすばらしい村をかれは享受せよ。

そなたの蓮根を持ち去ったかれは、欲望を離れることなく、死に遇うがよい。バラモンよ。

注釈 (*Jātakatthavannaṇā*) によると、四つの特色 (*catussada*) というのは、多くの人びと、豊かな穀物・繁茂する樹木・豊かな水である。<sup>(33)</sup>

この例文から推察すると、Śār° の *sasaptôtsadam* は七つの特色を有するウトクータの村の意になり、その具体的な特色内容として *satṛṇakāṣṭhōdakam dhānyasahagataṃ* を挙げたと解することができよう。Śār° の他の類似の本文中にもまた *sasaptôtsada* の形を伝えているゆえんであると思われる。(チベット訳は *sasaptôtsada* の語義が不明確なために欠訳した可能性が大きい。)『摩登伽経』が「人民殷富」とあるのは *sattvôtsadam* (もしくは *sattôtsadam*)

と原文にあったに相違ない。なお「其土豊盛」は *satṛṇakāṣṭhōdakam dhānyasahagataṃ* に対応するかと思われる。

さきに指摘したように、『舎頭諫太子二十八宿経』にプシュカラサーリン(弗袈裟)を「服食菓草。身有七合。合集草木。供事水火及梵天王」といっているうち、「身有七合」は *saptôtsada* が原語であったと推定される。つまり、本経では *saptôtsada* はウトクータ村についてのべた語ではなく、プシュカラサーリン自身の身体的特徴を説いた語になっている。

三十二相を説く *Dīgha-nikāya* の *Lakkhaṇa-suttanta* (『三十二相経』) に *saptôtsada=sattussada* について、次のようにある。

*sattussado hoti* … pe —

*satt'ussadā hoti, ubhosu hatthesu ussadā honti, ubhosu pādesu ussadā honti, ubhosu aṅsakūṭeṣu ussadā honti, khandhe ussado hoti.*<sup>(34)</sup>

七つの隆満がある。…乃至…。

七つの隆満がある。両手に隆満があり、両足に隆満があり、両肩に隆満があり、頭頂に隆満がある。

T. W. Rhys Davids は *ussada* (= *utsada*) の動詞語根を *ud-√syād* であると推定する (Pali English Dictionary, p. 157)。一般にはサンスクリット語形では認められないが、語義は水が噴出する意である。<sup>(35)</sup>そして、当面の *utsada* に関する意味として (1) *protuberance, bump, swelling* (*mahāpurisalakkhaṇa*) (2) *a crowd adj full of (—°) in phrase sattussada crowded with (human beings)* D I. 87 (cp. DA I. 245 : *aneka-sattasamākiṇṇa* ; but in same sense *Buddhist Sanskrit. sapt-otsada* Divy 620, 621) が挙げられる。

このうち、隆起、隆満の意味に用いられたのが三十二相のうちに数えられる *saptôtsada* の場合の *utsada* であり、横溢、多数の意味に用いたのが、パーリ語の *sattussada* であることが知られよう。ところで、T. W. Rhys Davids が *sattussada* と同じ意味で、*Divyāvadāna* の *Śār°* で *saptôtsada* が用いられていると指摘しているけれども、*sattussada=sattvôtsada* であるから、*sattva=sapta* とみなすことは釈然としないものが残る。

F. Edgerton の *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, Vol. II. Dictionary の *utsada* の項 (p. 127) には次のようにある。

It seems clear that *this* *sattussada* in Pali=skt. *sattvotsada*, *a bounding in living creatures*. It seems to have been falsely sktized in Divy (which, or its source, obviously followed closely a M Indic original very close to the Pali of DN) to *saptotsada*, because the adapter knew familiarly this cpd. as one of the 32 *lakṣaṇa*. Presumably he thought it meant here *containing seven elevations* of some sort, but I see no use in speculating further as to his intentions. とある。しかし、*sattussada* を誤まっ

て *saptôtsada* とサンスクリット化したのは、三十二相のうちの第十六相としての *saptôtsada* を作者が知っていたから(混同したの)だとするのは速断であるように思われる。*saptôtsada* はすでに指摘したように *catussada* という豊かな村落の四つの特徴を示す語によって推測できるように、作者は七つの特徴をもつ村落と解していたにちがいないからである。

今世紀に入って *Dīghanikāya* のサンスクリット断片がいくつか中央アジアで発見されていることから推測されるのは、*Śār°* の作者が資料として用いた *Dīghanikāya* は実はパーリ語ではなくサンスクリット語で書かれていた可能性があるということである。もしそうだとすれば、サンスクリット原資料ですでに *saptôtsada* もしくはプラークリット語の *sattôtsada* の語形を存し、当初から七つの特徴をもつ村落を意味したことになるであろう。したがって、*satṛṇakāṣṭhodakam dhānyasahagatam* は *saptôtsada* のいくつかを具体的に列挙したと解することができる。チベット訳に「ウトクータ村にはあまねく地と水と樹木があり、さまざまな穀物がみのり」とあるのは、この際、参考とするに足りる。

以上、要するに *saptôtsada* は *Dīghanikāya* の *Am°* の類似文に準拠すれば *sattvôtsada* と改読することもできるが、*Risa-jātaka* の類例にしたがえば、*saptôtsada* という現行の語形のままで読むことができるのである。また既述のように *sattussada* に対応するプラークリット語形の *sattôtsada* を想定して、*sattva* とも *sapta* とも解される *satta* と *utsada* との合成語が先行して、これをサンスクリット語形の *saptôtsada* に改めたと推察することもできよう。

## 注

- (1) The Divyāvadāna, a Collection of Early Buddhist Legends Sanskrit Text in Transcription, Edited from the Nepalese manuscripts in Cambridge and Paris, with Comparison of others Manuscripts, with Variant Readings, Appendices, Notes to the Text and Index of Words and Proper names by Edward B. Cowell & Robert A. Neil. Cambridge, (1886) 1970.
- (2) 山田龍城編『梵語仏典の諸文献』平楽寺書店 64—65頁。
- (3) The Śārdūlakarṇāvadāna, ed. by S. Mukhopadhyaya, Santiniketam, 1954.
- (4) Willy Zinkgräf, Vom Divyāvadāna Zur Avadānakalpalatā, Ein Beitrag Zur Geschichte eines Avadāna, Materialien zur Kunde des Buddhismus, Heft 21, Heidelberg, 1940.
- (5) Jarl Charpentier, The Uttarādhyayana-sūtra, pp. 109-115 (Hariesijjam dvādaśam adhyayanam). pp. 44-45, pp. 323-327 に解説がある。
- (6) 大正, 14, No. 551.
- (7) 大正, 14, No. 552.
- (8) 大正, 21, No. 1300.
- (9) 大正, 21, No. 1301.
- (10) 北京版, 甘殊爾諸經部 14, 40. Fol 248 a,l. 8-248 b,l. 1-6.
- (11) Vaidya 本 p. 319, ll. 10-16.
- (12) C 本 *tasmin khalu punaḥ samaye*. チベット訳も *yañ (=punaḥ)*.
- (13) C 本は *utkaṭam*, パーリ語(後述)は *ukkaṭṭham*.



- (14) C 本は saptotsadam, パーリ語では sattussadam.
- (15) C 本 upetaḥ.
- (16) V 本は gr̥hiṇyām anā [kule jātyām vā] kṣipto とあり, C 本は gr̥hiṇyām anākṣipto とあるが, チベット訳 *rigs 'khrugs pa med pa / rigs dañ rus ma smad pa /* によれば, V本の〔 〕を生かして gr̥hiṇyām kule jātyām vā (または kule jātyāṃs ca) anākṣipto と読むのがよいであろう。
- (17) V 本 yāvad āsaptamamātāmahapitāmamaham /yugapad upādhyāyo 'dhyāpako. C 本 yāvad āsaptamaṃ mātāmahaṃ pitāmahaṃ yugam upādāya /adhyāpako. チベット訳の *pha mes dañ ma mes bḍun rgyud kyi mkhan por gyur pa dañ / klog pa dañ /* を参照すると, C 本の yugam upādāya は yugapad upādhyāyo の誤写または誤読である。
- (18) C 本 sanirghaṇṭa.
- (19) V 本 itihāsapañcamānāṃ padako. C 本の ihāsapañcamānāṃ sādr̥ṣo vyākartā padako. の sādr̥ṣo vyākartā は padako の衍字が本文に混入したものと考えられる。
- (20) V 本 lokāyatayajñamantramahāpuruṣalakṣaṇeṣu paragaḥ / sphitam utkūṭaṃ nāma は C 本では lokāyatayajñatantre mahāpuruṣalakṣaṇeṣu pāragaḥ / sphitām utkatāṃ nāma. チベット訳は *'jig rten rgyan phan pa'i gtsug lag dañ / mchod sbyi gyi rabs dañ / skyis bu chen po'i mtshan rnams rdes su sbyañ bar rgyas śiñ grol bar ston pa zīg go /* (=lokāyataśāstrayajñatantramahāpuruṣalakṣaṇeṣu...).
- (21) 前掲注(10)北京版参照。
- (22) Vaidya ed., p. 319, ll. 19-22.
- (23) ibid. p. 320, ll. 28-32.
- (24) Śār° の作者が Am° を資料に用いている確かな一例として, 他に次の一文がある。  
 atha prakṛtir bhikṣuṇī dṛṣṭadharmā prāptadharmā viditadharmā akopyadharmā paryavasita-dharmā adhigatārthālābhasaṃvrttā tirṇakāñhṣāvivicikitsā vigatakathamkathā vaiśāradyaḥprāptā aparapratyayā ananyaneyā śāstuh śāsane anudharmacāriṇī ājāneyamānā dharmeṣu bhagavataḥ pādayoḥ śirasā nipatyā bhagavantam idam avocat — (Vai° p. 317, ll. 18~22).  
 これと対応する Am° は次のようである。  
 Atha kho brāhmaṇo Pokkharasādi diṭṭha-dhammo patta-dhammo vidita-dhammo pariyoḡāha-dhammo tiṇṇa-vicikiccho vigata-kathamkatho vesūrajjaḥpattatto aparapaccayo satthu sāsane Bhagavantam etad avoca : — (PTS. vol. I, p. 110, ll. 14~17)
- (25) *Digha-nikāya* (PTS), vol. I, p. 87, ll. 1—5.
- (26) *op. cit.*, p. 87, ll. 6—9.
- (27) *op. cit.*, p. 88, ll. 3—10.
- (28) 後秦仏陀耶舎共竺仏念訳。大正, I, 82頁上。
- (29) PTS, pp. 21—25.
- (30) トゥリジャンクがマータンガ族であることはコーサラ国王パセーナディ (Pasenadi=Prasenajit) がマータンガ族出身であることと関連があるかも知れない。これについては拙著『インド古典論』上, 筑摩書房50—51頁参照。
- (31) *Dighanikāyaṭṭhakathāṭīkā, Linatṭhavaṇṇanā* (PTS), vol. I, p. 376.
- (32) *Jātaka*. IV, p. 309. (No. 488), ll. 26—29.
- (33) *Jātakaṭṭhavaṇṇanā* by V. Fausbøll, IV, p. 311, ll. 7—10. idam so lābhasakkārāpagame mahantaṃ domanassaṃ uppajjatīti lābhasakkāragarahāvasena kathesi, sahāyatāpasena vuttagāthāya catussadan ti ākiṇṇamanussatāya manussehi bahūtadhaññatāya dhaññena sulabhadārūtāya dārūhi sampannodakatāya udakenā 'ti catūhi ussannaṃ catussadasamannāgatan ti attho.

(34) *DN.* vol. III, p. 151.

(35) この点について、次の語解釈が参考になる。

R. L. Turner, *A Comparative Dictionary of the Indo-Anyan Lauguges.* Fasc. I—VI. 1867 útsa-  
m. 'spring of water' RV. 1879 utsádana-n, 'putting away' ŚBr, Causing to fill up suśr, 'raising'  
lex [ $\sqrt{\text{sad}}$ ]

pl. ussádana-n, 'overflowing'

Marathi 語 usṇā° 'borrowed, lent'

1873 utsanna

1. プラークリット語 ucchaṇṇa- 'up-rooted'

2. プラークリット語 ussaṇṇa- 'sunk, failing in duty (of a sādhu).

なお, *Ardhamāgadhi Dictionary*, vol. II. p. 309 の ussaṇṇa の項には「多くの」(bahulatā, bahutā bahu) の語義を示してある。